

# ポラリスを仰ぐ北の大地から

## 臆病者

北海道大学医師会 会長 寶金 清博

生来の臆病者である。

靈感と言えば聞こえが良いが、「見える」のである。子どもの頃から。

広いホテルの部屋は苦手である。

高級なホテルには、至る処に「鏡」がある。深夜、一人で歯磨きをしていると鏡の中を何か、あるいは何者かが一瞬通り過ぎる。部屋には天地神明に誓って、僕一人である。振り返るが、もちろん誰もいるはずがない。

あるいは、鏡の中にある鏡の中を一瞬、影がふっと過ぎ去る。もう布団をかぶって、ブルブル震えながら、朝が来るのを待つしかない。

病院でも、いろいろなものを「見た」。この大病院はもう100年になんなんとしていて、どれだけの人々がここで息を引いたことか。いや、違う、違う。「見える」のは病室ではなく、病院長室なのだ。深夜の病院長室で一仕事しようと思って、照明をつけた瞬間、確かに何か、いや何者かが、暗闇の中で一瞬、動くのが「見える」のである。

病院が建つ以前、明治の頃、あるいは大正末期に、この場所で何かがあったに違いない。その穢れが、ここに棲んでいる。

病院長室に脅迫状が届く。あるいは、理由もなく面会を求める不審者もいる。最初は、立腹し周りにあたりちらし、監視用ビデオを設置する。挙句は、おどおどと周囲をうかがいながら、身の不運を嘆く。姿の見えないものに怯える。

世の中には、畏れるべきものがある。人智で全てが説明される訳ではない。理を尽くしても理解してくれない人々、そして、先の見えない奈落がある。「見える才」は、寝苦しい夜や茫漠たる不安を引き起こす不幸な才能かもしれない。

しかし、その畏れを忘れることの方が、遥かに恐ろしい。人間は、この世の中の神羅万象の一かけらを知っているだけなのだ。深甚な不知のものの存在への畏敬がある方が、健全かもしれない。

今週も出張がある。また、何を「見る」のか。



## 背負い続ける力

札幌医科大学医師会 会長 山下 敏彦

中学時代から柔道を始めた私にとって、山下泰裕氏は、憧れの的というよりも「神」的存在である。今年7月、その山下氏とお会いする機会を得た。東海大学札幌キャンパスでの講義のため来札されたのを機に、丸山淳士先生ならびに水落満雄先生（元東海大四高柔道部監督）とともにご一緒させていただいた。さすがに「神」を前にして、私はすっかり舞い上がり頭の中も白くなりかけたが、山下氏の風貌に違わぬおおらかで全く飾らないお人柄に触れ徐々に緊張も解けていった。

山下氏は、言わずと知れたロス五輪金メダリストにして、不滅の203連勝記録保持者である。日本の期待を一身に背負ったロス五輪では右脚を負傷しながらも見事金メダルを獲得した。その後も、世界における日本柔道のプレゼンス向上のため、柔道を通じた青少年育成のため、そして国民栄誉賞受賞者として、山下氏はさまざまな役割と責任を背負ってきた。最近ようやく、井上康生氏らの後進も育ち、これまで犠牲を強いてきた家族との時間を優先させようと思っていた。しかし、2020年東京五輪に向け、山下氏はJOC選手強化本部長を任せられ、大会本番では選手団長を務める予定となった。山下氏は「2020年の東京大会までは、頑張らせていただくことにしました。それで最後です」と、笑顔で語っていた。山下氏の「背負い続ける人生」はまだしばらくは続きそうである。

会食の後、宿泊先までのタクシーの中で、私どもが行っている脊髄損傷に対する神経再生医療の話をお熱心に聞いていただいた。タクシーを降りる際、「お互い頑張りましょう！」と言って、握手をしてくれた。山下氏の手は乾いていてゴツかったが、その握り方は優しく温もりがあった。その手を通して、何か「力」をもらったように感じた。これからも、もう少し頑張っていけそうな気がした。